東方妖快園

八雲糖類おぅ@八雲藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方妖快園

【Ｎコード】

Ｎ１００５Ｘ

【作者名】

八雲糖類おぅ@八雲藍

【あらすじ】

狂人、狂歌幽月は裁判にかけられた時に大衆の目の前で自殺した。がしかし神の「好奇心」のせいで幻想郷へ転生することとなった・・・

時系列は結構最近！？

死亡フラグビンビン♂な世界を主人公が面白おかしく暮らす。そんなお話です

作者が出来る限りテンプレ破壊をいたしますが文才がカス並ですの

であまり期待をするとたいへん残念な気持ちになるでしょう・・・・

プロローグってほかの言い方有ったっけ？（前書き）

嗚呼、やっちまったよどうしようず
まあ自分が楽しいんだからいいかなｗｗ

プロローグってほかの言い方有ったっけ？

狂人

人は俺をそういうだろう。

物心つく前に母親が死んだ。高校入って間もない頃に親父が死んだ。親父は大きな企業の代表取締役・・・簡単に言えば社長だったので金には困らなかった。
会社は適当に親父の右腕って呼ばれていた奴にやった。つまり俺はニートである。
けれどもただのニートじゃない。別にニートとしてでなく、人として。
そう、俺は俗に言う犯罪者ってやつだ。

犯罪にも色々種類はあるだろう。たとえば「殺人」「窃盗」「強盗」「強姦」「薬物」・・・・・・・・・とキリが無いぐらい挙げられるだろう。
俺はそんなかで多分、一番最悪って言われるであろう「殺人」をした。
最初は好奇心でやった。そのときに感じた快楽を忘れられずに2人、3人、4人・・・
今ではもう数えられないくらいやった。
人殺しではなく、殺人鬼になっていった。

でもそんだけ殺したんだから警察も黙っちゃいなかった。
結論をいうと捕まった。
それはもう大人数に取り押さえられて。
俺は別に抵抗しなかった。しても良かったんだが、なんかこれで捕

まったら面白いんじゃないかって思ってしまった。
どうせ死刑とかになって人生終了なだけだって分かってたはずなのに捕まった。

裁判にかけられたとき、俺が殺した名も知らない奴らの遺族が俺になんか叫んでたが全部無視した。
検察やらに死体が皆まるで獣に食われた様だがなぜかって聞かれた。
俺は正直に話した。
するとその場にいた者皆凍りついた。
なぜか？それは俺が食ったからだ。
理由付けるなら殺した時と同じく好奇心に駆られて。
ついでに殺した時の相手のことを覚えてる限り話した。
遺族どもはみな絶望しきった顔をした。
俺はもっとそんな顔を見たくなった。
なので手錠かけられてる手を首に持っていき、思いっきり引っかいた。
腐っても俺は何人も殺してきた殺人鬼。
一発で視界が揺らいだ。意識が完全に失う前にそこらにいた者の顔を見た。
皆不の感情をだした。悲鳴をあげたのもいた。
俺はそれらが見れて満足だった。

そして俺は死んだ。

プロローグってほかの言い方有ったっけ？（後書き）

一話と設定を今日中にうpしますぜー

第一始　すべてはここからはじまｔ（ｒｙ（前書き）

一話目・・・・だけど東方の世界にすら行ってないこれいかに

第一始　すべてはここからはじまｔ（ｒｙ

「知らないてんじょ・・・空間だ」

ありきたりなセリフを言おうとしたがそこに天井はなく見渡す限り
真っ白な空間で
上下左右あるの無いのかも判断できなかった。

「おお、気が付いたか」

いきなり俺以外誰もいないはずの空間からそんな声がした。
気づくと目の前に２０代ぐらいの男がいた。
・・・・よし、青年Ａとなづけよう。

「・・・・誰だてめぇ」

「ふふふ、聞いて驚くなよ」

「早く言え」

すると青年Ａは大きく息をすい

「遠くば声を耳に聞け！
近くば寄って目にもみよ！
やあやあ我こｓ「早く言え」・・・・わあった、わあったよ
だからさその俺の首を絞めようとしないでくれ」

「チッ」

仕方なく首締めを止めてやると

「俺は神だ！ＧＯＤだぜ！」

なんということだ青年Ａは神Ａだったのだ。

「いや神Ａって扱い酷くね？」

心を読むな

・・・でだ、こいつが仮に本当に神だとしたらなぜ俺なんかを相手にしてんだ？

普通は地獄行きとかじゃないんだろうか？

いやこの場合、なんかを理由に転生させる的なことを言ってくるのかもしれない。

「なぜ分かったし」

ビンゴだったみたいだ。

「で？なんで俺を転生させるんだ？

作者はテンプレにすんのははいやだって言ってたはずだが」

「おいおいメタるなよ・・・

なぜ転生させるかはまあ簡単に言えば好奇心でだ」

神Ａはまた変のことを口走ってきた。

「好奇心だ？」

「ああそうだ。お前も『好奇心』で罪を犯したんだろう？

だったら罰するよりその罪に関わることで罰したほうがいいんじゃね？
ってさっき思いついたから即採用したのさ」
こいつは本当に神なんだろうか？
ただの？にしか見えないのだがなぜだろう？
「意図が分かったことで更に質問だが俺はどんな世界に行くんだ？
できれば退屈しないとこがいいんだが」
「ワオ、更生する気ゼロですね分かります
まあ世界観としてはお前のいた世界の平行世界だ。
もっと言えばその世界の隔離された所で人はもちろんのこと妖怪や
俺よりは位は下だが神だっているお前の常識を全否定するようなと
こだ」
「・・・・幻想郷だろそれ、東方の」
まさかそんな死亡フラグ満開な所に行く羽目になるなんてな・・・
退屈無縁だな
「なんだ東方しってんなか？
じゃあルールと能力・種族を説明するぞ」
・・・・・ん？こいつ今なんて言った？
「おい、種族って人間じゃないのか」
「ＮＯＮ！お前は妖怪なってもらうぜ」

「妖怪か・・・・ってことは寿命も長くなるしもっと強くなれるってことか」

「戦闘狂（バトルジャンキー）かよお前。
次にルールだが基本的に原作に介入してもらってもかまわない。だが原作ででてくるキャラは殺すなよ？」

「りょーかいだ」

といっても自分の退屈を無くしてくれる様な人物達まで殺そうとは思わない。

「最後に能力だな
これは作者が相当考えてたぞ
チートすぎのばっか思いついて大変だったらしい」

「メタんなっていった奴がメタんなよ」

「それは置いといて、
お前の能力はだな『能力を創る程度の能力』だ」

「チートすぎんだろ
相当考えた結果がそれかよ」

しょうがないじゃないかー！これでも頑張った方なんだぞー！

「作者出てくんな
んでその能力はどんな能力なんだ？」

「聞かなくても分かるだろ」

「だな」

なんともシンプルで分かりやすい説明なんだ。
久しぶりに感動したぜ。

「さてと、説明も済んだことだし
Ｌｅｔ' ｓ　転生だ！」

神Ａがそういった瞬間、俺の足元だけ黒くなり俺はそこに落ちていった。

第一始　すべてはここからはじまｔ（ｒｙ（後書き）

設定も投稿しますおー

号外　キャラ設定（前書き）

今日はこれで最後ですぜ旦那

号外　キャラ設定

名前：狂歌（きょうか）　幽月（ゆうげつ）
性別：バベルの塔が下半身に聳え立つ
年齢：２２歳あたり（本人はあまり覚えていない）
身長：１７２ｃｍ
体重：５４ｋｇ
種族：妖怪
武器：素手・刀・仕込み刀（番傘に一本）
能力：能力を創る程度の能力

容姿：髪は渋い紫、目は緑、端麗な顔立ち
服装：派手な着物を好んで着る、だいたいは銀魂の高杉みたいな着物、黒い番傘を持ち、刀を掛ける

性格：基本的に楽天家で快楽主義、少し周りからずれている
好きなもの：面白いもの、楽しいこと、酒、煙管、非常識
嫌いなもの：退屈、暇、常識

備考：プロローグとそれ以降での変わりようは最早仕様となっている、髪は元は赤だが染めた。
高杉晋助に似ているのは本人が似せたから
能力の説明：分かるだろ？　（ｂｙ神

モブ
名前：屋久間（やくま）　祷霊（とうれい）
性別：バベルの塔がｓ（ｒｙ
年齢：測量不能
身長：１８０ｃｍ

体重：５８ｋｇ
種族：神
武器：戦う気無し
能力：世界をつくり管理する程度の能力

容姿：茶髪黒目、少し細い目
服装：暗い赤のさむえ、なんとなく木刀を持ってるが使う気は毛ほどにない

性格：マイペース、ぐうたら、怠けや
好きなもの：甘いもの、ゲーム、ＰＣ
嫌いなもの：真面目に働くこと、努力

備考：名前から分かるように？作者の化身。もとい小説の説明役で性格などは作者っぽくしてある
つまり駄神である

名前：落雲（おちぐも）　空（うつ）
性別：男→女
年齢：１８歳
身長：？→１５５ｃｍ
体重：４２ｋｇ
種族：妖怪
武器：上目遣い（無意識）
能力：恩は返し、恩を返される程度の能力

容姿：茶髪紅目、丸っこい目
服装：学ラン

性格：律儀・常識人・苦労人
好きなもの：平和、ビーフジャーキー、日本茶
嫌いなもの：自己中、酒

備考：屋久間に無理やり転生させられた上、性転換までさせられた哀れな娘。
基本的に幽月、カナに突っ込む。

能力の説明：簡単に解釈すると自分がした行いは自分に降りかかり、自分にした行いはした者に降りかかる。しかし何が何でもそうはならなく（恩）限定となっている。

号外　キャラ設定（後書き）

・・・のりで書き始めちゃったけどたたかれたらどうしよう
まあ自己中的にいっちゃうと自分が楽しむってのが第一目的です

第二笑　幽月、幻想郷に立つ（前書き）

二日連続投稿ですね
今日はこれだけです（いつまでこんなに続くのだろうか）
そういえばがっこーの帰り道に１００円拾いました。
即ジュース代になり、自分の喉を潤してくれました。
こんな駄目な奴が書いたものですがよろしくです
それでは第二笑　ガ●ダム大地に立つです

第二笑　幽月、幻想郷に立つ

「知らないてんじょ・・・草原だ」

デジャヴュを感じられるセリフを放ったがそれはさておき
気が付いたらそこは辺り一面の緑の海だった。都会じゃお目にかかれない光景だ。
太陽はちょうど天辺にあり、そこらじゅうで蝉が鳴いている。

「うっし、ちゃんと着いたようだな」

声がしたほうを向くとそこには俺を転生させたあの神Ａがいた。

「神Ａって・・・俺にはちゃんと名前あるから、神Ａじゃなくて屋久間　祷霊って言う立派な名前があるから」

そんなの初耳だ。というかなぜ神Ａがここにいるんだ？普通はテレパシーやら手紙やらで登場するんじゃないのか？

「いや神Ａじゃねーよ。お前の耳は素敵なドアノブですか？あとメタるなよ」

「ごちゃごちゃ五月蝿い早く言え」

「お前俺に会って間もないのに３回も早く言えって言ったぞ。何故ここにいるかか・・・・それはだな平たく言えばテンプレ破壊のためさ」

・・・こいつはなぜ自分の言っていることとやっていることが矛盾

しているんだ。

「そしてここは幻想郷のどっかだぜ！」

どっかって把握してないのかよ・・・

「・・・ん？幻想郷だと？」

「イェース」

「幻想郷も出来てなくて東方キャラもまだ生まれてない太古の昔とかじゃな無いのか？」

「ＤＡ・ＫＡ・ＲＡ、テンプレ破壊なのさ。といっても霊夢とか魔理沙とかはまだ生まれてないけどよ。具体的に言えば１９６３年の夏だな」

「１９６３年というとケネディ暗殺の年か」

「お！意外と頭いいな。見直したぞ」

なんかこいつに言われるとイラッと来る。

「でも原作から三十年以上もあるぞ、この時間どうすりゃいいんだ？」

「妖力や能力の練習でもすればいいんじゃね？」

なんとも適当な答えであるが確かにそれが一番いいのかもしれない。

「後、お前の能力あるだろ？」

「能力を創る程度の能力だっけか？」

「ああそれなんだがな今のお前じゃその能力の半分も使いこなせないぞ」

なんでだろうか、能力を使うのになんか特殊な力とか使わないといけないのか？
それともこの目の前にいる神が嫌がらせ的な意味でやってるのかろうか？

「理解できてないみたいだな、まあ仕方ないか・・・
簡単に言うと強力な能力を持つとその者が能力に飲まれることがあるんだ。フランドールとかがいい例だろう、狂気に染まり見境無く破壊し続ける。そんなことを繰り返していけばいずれ体はもたなくなり死んじまうだろう、そのためだ」

「お前もたまには役立つことを言うんだな」

「・・・そしてもうひとつ理由があってな、普通の妖怪の場合３０年ぐらい生きて妖力が増えたとしても良くて中級妖怪ぐらいだろう。そんなんじゃ絶対に原作キャラと戦っても勝てないだろうし、下手したら死ぬうえに見ている俺もつまらない、だからたった今この地に生まれたお前に大妖怪の比にならない位の妖力を入れてみたから下手したら粉砕☆玉砕☆大喝采しちまうんだ。
それを制御出来るくらいになったら能力もだんだんと使えるようになると思うぞ」

おｋ、把握・・・って俺は何を言ってるんだ

「それは分かったがなんだこの格好は？」

文字じゃこの格好って言っても伝わらないので説明すると誰がどう見ても高杉晋助って言える位の服装をしている。高杉をしってる輩がみたら完璧にコスプレって思うぐらい完成度高い着物である。近くには黒い番傘と鍔のない太刀が二つ、短刀・脇差がひとつづつ落ちていた。

「高杉のコスプレ・・・と言いたい所だが似て非なるものだぞ。一見コスプレに見えるそれは破れたりしても勝手に直ってくれる優れものだ！

そしてそこらに落ちてる物はお前にやるぜ。皆、大業物の刀たちだが一本だけ最上大業物って呼ばれるやつも混じってるぜ」

最上大業物って言うと長船秀光や初代兼元とかの恐ろしく切れるってやつか。

「それで、どれがその大目玉なんだ？」

「その番傘だ」

・・・こいつは頭がすこし、いやかなりおかしい様だ。可哀想に。

「・・・いやこいつただの傘じゃないからね？

ほらこれ、仕込み刀だからね？

毒吐かないでね？結構心にきてるからね？」

屋久間が傘の持ち手を体を弓形にしながら引くと美しく鈍い光を放つ刀が出てきた。

確かに良く切れそうだ。

「なんでこんなまどろっこしいことするんだよ」

「なんとなく」

酷いものだ。だが案外気に入ったので有難く貰っておこうと思う。

「んじゃ、俺は帰りますかね」

よいてこしょと屋久間は立ち上がると「なんかあったらよんでちょ」

といい消えていった。

さてこれからどうしようか

第二笑　幽月、幻想郷に立つ（後書き）

なんというか変な終わり方ですねｗｗｗ
感想は大歓迎です！感想だけでなく「ここはこうした方がいい」だとか「ここが変ｏｒ間違ってる」のようなものでも大大大歓迎です！

第三願　やっぱ自分の家は落ち着く（前書き）

今回は幽月さんがＭＹ　ＨＯＵＳＥを作る（作らせる）お話です。
次話からようやく東方キャラ登場です。
４話目からやっと原作キャラって遅すぎる・・・・
それでは駄文ですがお楽しみください

第三願　やっぱ自分の家は落ち着く

とりあえず屋久間が消えてから俺は妖力の練習をした。
練習といっても妖力を抑えることと妖力を開放するといった作業を延々と続けていった。
ぶっちゃけ本音を言ってしまえば妖力の使い方が全くといっても良いほど分からないため途方に暮れていたところ、人間だったころと比べ感じた事のない力が湧いたので勘で操ってみたらそいつが妖力だった。という一連を練習と呼んでいるだけだった。

たったいま気付いたんだがとっくのとうに日は傾き空一面鮮血みたいに真っ赤になっている。
ここで問題が発生した。何かというと暮らしの三大重要要素衣食住の内の住である。衣はすでにあるため問題ない。食はそこらにいる獣でも狩ればいいだろう。しかし住の場合、最低雨がしのげる場所ならいいだろがそんなに長いことその生活するのは俺には無理だ。・・・・・あいつ呼ぶか。

「おーい屋久間、でてこいや」

しかし呼んでみたものの反応が無い。何かあったら呼べとは嘘だったのだろうか。「いや呼ぶのずいぶんと早くない？」

「呼べと言ったのはお前だろう」

「言ったは言ったけどさ、普通だとぜんぜん呼ばずに痺れを切らしたこっちが勝手に行くってのじゃないの？」

だったら呼べとか言うな。

「まあいい、それで何のようだ？」

「家を作ってくれ」

「・・・・は？」

物分りの悪い奴だ。夕暮れ時に行くあての無い俺が家を作ってくれと頼んでるのが分からないのなんて。

「物分りが悪いって何でそうなるんだよ。というか作ってやってもこっちは構わないのだが勝手に家とか建てるとここらを縄張りにしてる妖怪が黙ってないと思うぞ」

確かにそうだな、今の俺では妖力が有っても使い方が分からないので宝の持ち腐れ。

そして相手は此処を縄張りのにしているってことはそれだけの力があるという証拠。きっと太刀打ち出来ずに終わるだろう。

「それじゃあ夢幻館みたいに現実世界の間に作ったらいいんじゃないか？」

「そりゃいい案だな、現実世界と俺のいる世界の間に作るってのはどうだ？」

現実世界とこいつの世界の間か、悪くないな。

「それでいいと思うぞ」

「よし承知したぜ。今すぐ作ってやんよ」

そういうと屋久間はその場で座禅を組み厨二じみたセリフを放った。
するとやつの周りに強烈な光が輝き始め、俺はあっという間にその光に飲み込まれた。

光が止み目を開けるとそこには先程までいた草原ではなく、人工的に作られたのが見受けられる自然の中にいた。近くには川があるのだろう水の音が聞こえる。
上を見るとそこには太陽や月・星といった光を灯すものは無く暗かったが十分に辺りを見渡せるぐらいの明るさはあった。
幻想郷の美しさとはまた違った美しさを感じられた。

「こんなもんかな？世界と世界の間に空間を作って人が暮らせるように調節したぜ。すばらしい手際の良さだろう？」

たしかに今回ばかりはこいつのことをすごいと思った。が、肝心の家が無かった。これじゃあ、変な場所へ盛大にルーラしただけではないか。

「手際が良かったのは認めるが家が無いようだが？」

「一応作ったは作ったんだがな」

「一応とはどういうことだ、作ったことに変わりは無いんじゃないのか。」

「そうなんだが手違いで現実世界の家を引っ張って着ちまったんだ。」

・・・この空間で知らない誰かと暮らせというのか。いきなりつれ

てこられた方だって困るだろう。第一俺が気まずい。

「でも住んでいる人はいなそうだったし俺の神力で修理したあと立てられた当時並みに綺麗にしてあるから」

「ならいいか」

誰も住んでいない家だったら別に持っていってもいいだろう。え？ダメだって？俺に常識を求めないではしい（ドヤ

「ここから結構遠くにあるからルーラすんぞ」

「ルーラって一回行った事ある場所にしかいけないんじゃないのか」

「ここは俺がつくったんだぞ？場所ぐらい手に取るようにわかるさ」

そういうと屋久間は俺をつかみなんかをつぶやくとそのまま上空へ上がり家があるであろう場所に向け一直線に飛んだ。空を飛んでいると前方に家らしきものが幽かに見えた。それからそれは近づくにつれどんどんと大きくなっていき到着した頃には巨大な洋館と化していた。

「・・・おい」

「どうした？あまりの大きさに言葉も出ないのか？」

「俺一人で住むには大きすぎじゃないか？」

「大は小をかねるって言うだろう。中を見てきたらどうだ？蛇口捻りゃ水かお湯出るようにしてやったから」

結構気の利くことするな、しかしどこに何の部屋があるか覚えるのが大変そうだな。

「まあ住んでるうちに慣れてくだろう。そーいうことで俺はこれからドラクエする予定だから帰るな」

「突っ込みたいところがあったがまあいい。今回のことは感謝するぜ、またなんかあったら頼む」

屋久間は「おうきに」と答えると消えてった。消えるとか便利そうだな。

「さて、今日は風呂入って寝ちまいますか」

自宅を探検するという奇妙な体験をしたが無事に風呂を見つけじっくり入ったが洋館なのになぜか銭湯のような感じの風呂だった。

そんなことがあったりして今は寝室探しをしているのだが妙に視線を感じる。というかあとを付けられている気がする。もの音がして後ろを振り向くと誰もいなく静かで薄暗い廊下だけだった。その行為を何回もしていた。最初はビクッとしていたがそう何回もおんなじことが立て続けに起こりもうなれてしまった。

「寝室はこの部屋か」

もう何十回も同じようなドアをあけてきたが今回で当たりだったらしい。一台のベットと机、本棚、大きめな窓と結構シンプルなものだ。　ガタッ・・・・又だ、後ろを見るとやはり何も無かった。ため息をつきながら寝室に入るとそこには

「うらめしや」

お化けの代名詞ともいえる台詞を俺に向けてさっきまでいなかったはずの少女が告げた。

第三願　やっぱ自分の家は落ち着く（後書き）

いかがでしたでしょうか？
ちなみにお化けの台詞でしたが小傘ちゃんではないですよｗ
次話はどんな話になるかは自分には皆目見当が付きませんｗｗｗ

感想は大歓迎です！

第四会　居候ができた！（前書き）

この話は今日二回書きました。
どういう意味なのかはいたってシンプルで新規小説に書いて保存しようとしたらなぜかウィンドウが落ち書いた文がパーと化しました。
それでは第４会をお楽しみ（できればですが）下さい

第四会　居候ができた！

「うらめしや」

・・・・誰だこいつ

「うっうらめしやー」

二回も言ってきた。さっきの出来事で何か出てきそうだと思っていたが本当に変な奴が出てきやがった。こいつの容姿は金髪で黄色の目、青と白のフリルがついたロリータ風の夏服、フリルがついた青と白のスカート、赤いリボンがついた帽子、白い手袋を装着したロリッな少女だ。
お化け定番の台詞を言ってきているのだが姿はハッキリしている上、かわいらしい外見のためこれっぽっちも怖くない。しかし何故かは知らないが見たことがあるようなないような気がする。

「ちょっと～無視しないでくれるかしら～」

「どっから湧いてきたんだ、というかお前誰だよ」

「湧いてきたって・・・わたしは蝿じゃないわ。それに人に名前を尋ねるときはまずは自分から名乗るべきじゃないかしら？」

確かにそうだな。

「狂歌　幽月だ。」

「わたしはカナ・アナベラルよ。騒霊（ポルターガイスト）なんてものをやってるわ」

思い出した。夢時空に出てくるキャラだ。確かＥｘアタックやボスアタックで鳥が出てくるから小兎姫に鳥屋だと思われてたはず。

「もしかしてここはお前の家なのか？だとしたら出て行くが」

「いいえ違うわよ。わたしは前いたところではもう怖がられなかったし相手にされなかったから適当に見つけたここに移り住んで（憑いて）みただけよ～」

「でも俺は最初から驚きもしなかったがな」

逆に驚いたり怖がったりする方が至難の業じゃないか？

「それもそうねぇ、でも移ってまたすぐにどこかへ行くっていうのも癪だからしばらくここに住んでもいいかしら？」

「この館、無駄にデカイから構わないぞ」

「あらありがとう。じゃあ遠慮なく使わせてもらうわね」

こいつは結構自分勝手な奴だ。だがこいつがいるだけで話し相手になるだろうから退屈しのぎにもなる、この館は2人でも大きすぎるぐらいだある上に第一追い出す理由が無いため許可をだした。

「しかしどこで寝るつもりだ？この部屋は1人部屋だから2人で寝るには狭いだろう」

「それは後で探すわ。これだけ広ければ客間の1つや2つぐらいあるでしょ」

そうだな。しかしもう少し話していたいとこだが今日だけで結構なことをしたためかなり眠い。

「すまねーが何かあったら明日にしてくれないか？もともと寝ようとしてたわけだし」

「しょうがないわねー、それじゃあ明日は早朝からわたしに付き合ってもらうわよ」

俺が「へいへい」と答えるとカナは消えていった。代わりにカナがいたところには大量の鳥が出現した。・・・・消えるのって流行ってるのか？そしてこの鳥を俺にどうしろっていうんだ。

眠くて考えるのもめんどくさい、明日考えよう。

「幽月に向かって道路標識をドーン！！超エキサイティング！！！」

「ぐぼえっ」

最悪な目覚めだ、時計などが無いため時間は分からないが結構早い時間帯だろう。
しかしこいつ、人の起こし方ってのを知らないらしい。こいつの起こし方が悪いため今俺は壊れたベットに埋まりその上に道路標識が刺さってるていうとても珍しい状況の中にいる。
痛みが見た目と反してそれほど無いため標識を抜くと刺さっていた部分がみるみる治ってきた。改めて今の俺は人間じゃないことを知った。

「おまえ、なんてことしてくれるんだよ。おかげでベットがご臨終じゃねーか」

「ふふふ、起きるのが遅い方が悪いわ。それに昨日言ったじゃない『早朝から』って」

そんな無茶苦茶なことがあってたまるか。起きるのが遅いってだけでベットを壊され標識を体に刺されるなんてありえない。・・・・・標識なんてどこにあったんだよ。

「それで？こんな早朝からどこに行く気なんだ？」

「夢幻世界に行って見たいと思ったのよ」

そこにいったら俺は確実に死・・・なないか。たしか夢幻世界は時間や命とかの概念は無いんだっけか？

「でもどうやって行く気だ？俺は残念ながらお前みたいに消えたり飛んだりすることは出来ないんだが」

「なら飛ばずに歩いて行けばいいんじゃない？お弁当もってピクニ

ックみたいに」

死亡フラグ全快な世界にピクニックしに行くやつなんて果たしてこの世にゃいるんだろうか？

答えはＹｅｓだ。目の前のこいつがいる。

「移動手段はわかったが夢幻世界ってどこにあるんだ？」

「知らないわ。行けばいずれ分かるでしょう」

・・・俺は当分こいつに振り回されるだろう。

第四会　居候ができた！（後書き）

はい糖類おぅです。
最初はまさかの旧作キャラでしたねｗｗ
カナってこんな性格なんだろうか？
夢時空やったときはあんまりつかめなったしｗｉｋｉには精神の不安定な少女から生まれたその一面って書いてあるし

次回はオリキャラ出ると思います。（バベルの塔は建ってません）

明日明後日、もしかしたら更新できないかもしれません。
でも最低でも火曜までにはしますのでご安心？を
ではではー
感想はいつでも大歓迎です！よろしければ書いて下さると自分は発狂しながら喜びます

第五行　夢幻世界に向けてＬｅｔ’ｓ　Ｇｏ！！！（前書き）

はい、糖類おぅです
なんとか火曜日までに書きました。（火曜までだから明日もセーフだったけれど）
最初にお詫びです。オリキャラが出るって言いましたが後半（といっても短い文だけど）にちょこっとしか出ません。
オリキャラはあんま考えるのが面倒なので数は限られると思います。
それでは第五行をお楽しみ（出来るわけないけど）下さい！

第五行　夢幻世界に向けてＬｅｔ' ｓ　Ｇｏ！！！

夢幻世界（死の世界）へ行くことが決定したので俺たちは屋久間に頼み食料などを貰い弁当を作った。
食料を貰ったとき屋久間が自分達で手に入れろとかほざいてたがそんなこたぁ知ったこっちゃ無い。弁当を作るときカナは標識を持ってきた。・・・・だから標識なんてどこから取ってきたんだよ。あいつに任せると大変危ない料理になりそうだったので俺１人で作った。

そんなことがあって只今夢幻世界の境目に多分向かって歩いている。多分なので合ってるかどうかも分からないのでもうかれこれ２，３時間は歩きっぱなしだ。
しかも緑一色で同じような風景がずっと続いているのでちゃんと進んでいるのか感覚がつかめない。南極や北極でずっと銀世界が続くと止まってるように感じるのと似ていると思う。

「なあ」

「ん？なにかしら」

「こっちであってんのか？」

「知らないわよ」

知らないじゃないだろ、確かに知らないって行く前も言ってたけどさ。

「お前、飽きないのかよ」

「飽きるわけないじゃない」

嘘だ！！！こんな進展しない空間に長時間いて耐えられるはずが無い。仮に本当なら不公平すぎるぞ。

「そんなにつまらないなら弾幕ごっこでもするかしら？」

「遠慮しとく」

え？退屈嫌いなくせになんでやらないかって？愚問だな、俺は弾幕・・・というか弾すら撃てないのに勝てるわけない。それにこの時代の弾幕ごっこならスペルカードなんぞないのでガチの殺り合いだからだ。こんなとこで死んじまうなんてつまらなすぎる。

「じゃあどうするのかしら？歩くも飽きた、弾幕ごっこもヤダなんて自分勝手ね～」

「どっちがだよ」

普通勝手に居候決める奴や死への片道切符を独断で2人分買う奴を自分勝手というんじゃないか？

「質問なんだけどいいかしら？」

「今度はなんだ」

「あなたってどれ位生きているのかしら？その尋常じゃない妖気からして相当の歳だと思うけど」

・・・聞くの遅くないか？朝だって言えただろ。

「昨日だ」

「・・・・え？聞き間違いかしら昨日って聞こえたのだけれど」

「聞き間違いじゃねーぜ、昨日生まれた」

やっぱ驚くだろう、俺も歩いてる途中に近くにいた弱小妖怪が顔を真っ青にして尾っぽまいて逃げてったのには驚いた。

「だったらよく耐えたわね、普通じゃ体がもたずにパーンってなるわよ」

「俺に普通は通用しない」

通用していたらとっくにとうに死んでらぁ。

「後、もうひとつ質問があるのよ」

「なんか嫌な予感がするんだが」

「此処、どこかしら」

予感的中しちまった。つーか、どこかしらじゃねーだろ。

「俺からも質問だが、じゃあさっきまで何でこの方向に向かって歩いてきたんだ？」

「なんとなくよ～」

薄々は分かってたがやっぱりあてずっぽかよ。

「帰り道覚えてるのか？」

「そんなわけないじゃない」

聞くんじゃなかった・・・

「それで・・・これからどうすんｄ（づどーーん

「なんだ？なんか落ちたみたいだが」

「自分の台詞遮られても普通に対処するのね・・・というか落ちるような音じゃなかったでしょ」

音がした方向を見るともくもくと煙が上がっている。

「あら、あそこじゃないかしら。どうする？行くのかしら？」

「当たりめーだ」

そういやあたり前田のクラッカーって懐かしいな。べつにどうってわけねーけど。

煙があがっていた場所へ向かうと小規模なクレーターが出来ていた。よく見るとクレーターの中に何かいる様だ。動く様子が感じられないので近づいてみると気絶している少女がいた。

「だれかしら？飛ぶのをミスして落っこちたって感じじゃないわよね～」

「真っ逆さまに落ちたって感じだな」

ほおって置くのはすこしばかり可哀想なので起こしてやることにした。

「起きる気配がねーなぁ、しょうがねーな。カナやれ」

「りょ～かいよ、エイヤっ」

グシャッと実に不快な音がした。

「ってえええええええ」

少女は目を覚ましたようだ。目を覚ましたってことはこいつは人間じゃねーな。人間だったら起きることなく寝続けることになるからな。

「なっなにしやがる」

「「起こしただけ（よ～）」」

「嘘をつくな！嘘を。こんな乱暴な起こし方があるか！」

「あるんだよ残念ながら」

本当に残念だがな。

「それは置いといて、あなたは何者かしら？」

「普通聞く方が名乗ってからじゃないのか？」

「わたしが先に聞いたのだもの、あなたが先に言うべきだわ」

ええぇーー、何だよそれ。絶対に自分から名乗らないのかよ。

「・・・しょうがないな、俺の名は・・・・・俺は・・・・・あれ？わからない」

・・・まずくないか？もしさっきの一撃で記憶吹っ飛んでたら最悪だぞ。

「あらそうなの、残念ね。それじゃあ私は名乗らないわ」

どうやったらそういう返答がでるんだよ。

「残念なのはお前の頭の方だよ。しゃーないなおまえのことは後回しで、俺は狂歌　幽月だ。このバカはカナだ」

「バカってひどいわよ」

「酷くねーよ。それでだが、お前の出来る限り覚えてることを教えてくれないか？もしかしたら思い出せるかもしれないぜ」

「確か学校帰りにコンビニ行こうとおもって歩く方向を変えたらいきなり視界が真っ暗になって、気が付いたらよくわかんねー男がいて俺を旅に行かすっていったら又視界が暗くなって・・・」

「そんで気付いたら落ちてたと」

「ああそうだ」

どうやら屋久間のヤローが犠牲者を故意に出したようだ。あとでしばいておこう。

「お前、いくあてないだろ？」

「まあそうだな」

「だったら俺のとこにこないか？」

第五行　夢幻世界に向けてＬｅｔ’ｓ　Ｇｏ！！！（後書き）

Q，いかがでしたでしょうか？
A，ゴミ以下

明日も投稿すると思います！
感想、アドバイス、駄目だし、誤字脱字なんでもけっこうです！
何かありましたら感想に書き込んじゃってください！

第六驚　二次元の俺っ娘ってすんごい良いよね（前書き）

呼ばれなくても飛び出てぎゃははは―！糖類おぅです
なんか後半から結構はしたない感じのないようになってます
あいかわらず文才はないですのでなんぞこれ目が腐るってなると思います

それでは第六驚を楽しめるわけ無いですがどうぞー

第六驚　二次元の俺っ娘ってすんごい良いよね

「だったら俺のとこにこないか？」

「・・・いいのか？」

「いいから言ってんだろ」

こいつはさっきから上目使いをずっと使用してきてる。これじゃ、目覚めたからじゃあなってほっとけないだろ。

「後、お前名前忘れたんなら不便だし俺が仮の名前つけてやろーか？」

「別に構わんが変なのにするなよ」

・・・・変な名前は無しか、結構キツいな。

「キツくねーだろ、つか俺が言わなかったら変なのにする気だったのかよ」

空から落ちてきたからなぁ、それに因んだ名前で良いか。

「・・・・・落雲（おちぐも）　空（うつ）とかどうだ？」

「苗字まで考えたのかよ、でも気に入ったぜ」

気に入ってくれて何よりだ。

「なあ、俺も何かお前らにしたいんだが。恩売られっぱなしは嫌だからな」

こいつはどっかの空気状態になってるバカとは違い礼儀がなってるようで少し安心した。

これで2人目の問題児なんて出たら俺は耐え切れない。耐えられるわけが無い。

「じゃあひとつ頼みがあるんだが」

「なんだ？俺に出来ることなら何でも言ってくれ！」

なんかこいつかわいいな。

「こっから夢幻世界まで案内してくれねーか」

「今さっきここに落ちてきた俺に案内しろと言うのかよ」

「「言うのさ（よ）」」

カナがやっと会話に参加し始めた。

「いやごめんそれ無理だわ」

何でもって言った癖にそりゃねーだろうが。

「じゃあどこにあるかわかるか？」

転生する前、東方を知らなきゃ元も子もない話だが賭けてみるのも

いいだろ。

「夢幻世界って確か博麗神社の裏山の湖にあるんじゃなかったっけか？」

・・・・マジでか、全然知らなかった。そうとなりゃ行き先も決まったわけだ。

「場所がわかったのは良いけど此処が何処かわからない以上意味が無いわね」

そうだった、結局さっきの状態から1人加わっただけであんまし変わってねーじゃんか。

「おいおいどうするんだよ」

「それが分かったら苦労しねーよ」

さて、これからどうしようか。（ドゴオオオオオオオオオン！！！

「なんだ？カナ、おめー標識ふっ飛ばしちまったのか？だから振舞わすなって言っただろうが」

「初耳よそんなの」

「いやあの轟音でその感想はねーだろ！」

あんぐらいでそんな根をあげてるようじゃまだまだだな。

「キシャアアアアアアアァァー！！！！！！！！」

「おいカナ、そんな下品な声上げんなよ。驚いちまったじゃねーかよ」

「私じゃないわ、空じゃないのかしら？」

「俺じゃねーだろ！どう考えても目の前にいる怪物だようよ！！」

そういわれて前を見てみるとどこが口なのかわかんない生物がいた。そいつはイソギンチャクを巨大化させた感じのモンスターだった。触手が結構卑猥な形をしてらぁ、ムーンライトノーベルとかじゃこっからあんなことやこんなことが開始するだろう。しかしこの小説はにじファンだからそんなことはＢＡＮされちまうから絶対にない。・・・・って俺はなにを言ってんだろう。

「どうすんだこいつ。戦うんだとしたら残念ながら俺は妖力は腐るほどあるがよ使いかたしらねーんだよ」

畜生、こんな奴と暴れたかったなぁ。

「俺はまず戦力外確定だろ」

確かに空にゃ無理があるな。となると戦力となる奴が1人となったため俺と空はカナを見つめる。

「なによそんなに見つめて～、もしかしてわたしに惚れちゃったのかしら？」

「誰が惚れるか」

「酷いわね～、ちなみにわたしも無理よ～」

「なんでだ？」

「めんどくさいに決まってるじゃない」

「そうか、ならしかたねーな」

めんどいならそりゃ無理だな。とりあえず逃げる準備でもすっか。

「いやいやいや、めんどいならしかたねーってどうゆうことだよ！やれよ！」

「そんなことといってるうちにどんどこ敵さんの触手は迫ってきてんだがな」

もう１ｍもねーな。

「うっうわなんだこいつら、気持ち悪りぃ」

少女に絡みつく触手、これは眼福だな。

「いい眺めだな」

「いい眺めね」

「見てないで助けろおおおお！って無いいい！？」

何が無いって言うんだよ、ナニか？

「なんで俺のアイデンティティーが何でねえええんだよおおお！」

ビンゴかよ、昨日といい今日といい俺の勘がほとばしってるな。というかナニが有ったってことは性転換俺っ娘ってことか。屋久間のやつそれ狙ったな。しょうがない今回ばかりは見逃してやらぁ。

「取れたんじゃないのかしら？」

こいつはこいつですんごいこと言うな。俺も人のこと言えないけどよ。

「あんなもん取り外し効くわけねーだろうが！」

おい勲章をあんなもん呼ばわりすんな、とっても大事なモンなんだぞ。

「そんなことより助けろよおおおお、、ってうわぁ」

刹那、巨大イソギンチャクに大量の札が刺さり空は触手から開放され地面に落ちた。

札の飛んできた来た方を見ると黒に赤という変わった巫女服を着た少女がいた。

第六驚　二次元の俺っ娘ってすんごい良いよね（後書き）

なにやらまた新キャラ臭がしますねｗｗまあ実際そうなんですがもうお分かりですよねｗｗ柄が色々とおかしいですけどｗｗ
うーむ、これ書いた直後の感想が「下手糞だな、さすが俺下手糞」っていうのと「下ネタすぎ、さすが俺煩悩」が浮かびました。
ちくせう本読むのが好きだから文庫本とか読んで文構成を参考にしようと思ったら自分の頭のスペックじゃできなかったｗｗｗ

明日も更新したいですね、キャラせってー更新しときます

感想、クレーム、アドバイス、駄目だし、誤字脱字、適当に思いついたこと
何でも構いません、何かありましたら感想やらどこにでも書きこしてください←批判ばっかじゃないかってびくびくしてる

それでは次回お会いしませう！ばいばばーい！

第七言　博麗さん現る（前書き）

すみませんなぜか投稿できないという症状があり昨日更新すると言ったのに遅れてしまいました。

第七言　博麗さん現る

よーっす皆大好きお兄さん幽月さんだぜ！
軽く今の状況を説明するぞ。ざっくり言おう、先程空を襲っていたイソギンチャクらしきものを瞬殺した巫女服の女に殺られそうだ。

「あんた、正直に言いいなさい。その馬鹿みたいな量の妖力はなにかしら？」

「俺の妖力だが何か」

「私は鬼子母神や天魔とか紫みたいな妖力を大量に持った大妖怪に会った事あるけど、あんたの妖力に比べたら足元にも及ばない位なのよ。何者なのよ」

「俺は俺だ」

「封印されたいみたいね、そこに直りなさい。負けるかもしれないけど」

妖力だけで実力を決められちまったら困るぜ。妖力は凄いかも知れねーけど使い方分かんねーんだよ。相手したらきっと俺の実力に驚くぜ、嫌な意味で。

「大丈夫だ話しにもならんぐらい俺は弱いから」

「嘘をつくな、じゃあその妖力は何なのよ。それだけの量があったら相当の年月生きてきたはずよ。それなら相当強いじゃない」

「相当の年月っていわれてもなぁ、絶対おまえより俺年下だから」
嘘などこれっぽっち言ってないのになぜ信じねーんだよ。少し無理があるかもしれねーどよ。
「私を侮辱してるつもりかしら？私まだピチピチの１８なんだけど」
「俺、生後二日」
「え、まじでか！？」
空にゃまだ言ってなかったっけか？
「生後二日って・・・・じゃあ産まれたときからその妖力を持ってたということなの？」
「そうだっつーの、だからそんな赤ん坊みたいなひ弱と殺ってもしゃーねーだろ」
「生後二日の赤ん坊がそんなペラペラ喋ってたら世の中の母親や父親はショック死するわよ」
そんなこと知ったこっちゃねーよ。第一俺だって嫌だわ。
「で？そのペラペラ喋る赤ん坊と騒霊と妖怪をどうするつもりだよ」
「しばらく私のうちで暮らしてもらうわ、幻想郷のパワーバランスがあんた一人で相当グラつくんだから。それにもし幻想郷に害があるようだったら消さなきゃいけないしね」

変な巫女服着た女の家ってどんなだ？今思い浮かべられるのは俺たちが向かおうとしてた場所付近だと思うんだが。

「暮らすぐらいなら構わないけどあなたの家ってどこにあるのかしら？巫女服って変わってるから変な家だったら嫌よ」

「巫女服着てるとこから察しなさいよ。神社よ神社、博麗神社よ」

・・・・今日は結構ツいてるな俺ら。

「あらそれは好都合じゃない、どの道通る予定だったんだもの」

「確かにそうだなでも何時開放されるかわからねーんだぞどうすんだ？」

「そんときはそんときだ、脱走なり脱走なり脱走すりゃいいだろ」

「いやそれ脱走いがいねーのかよ！？」

逆にそれ以外あるってのか？戦闘なんて相手の八百長試合になるだけだぞ。

「ごちゃごちゃ五月蝿いわね、ほらさっさと行くわよ」

「へいへい」

少年少女祈祷中・・・（祈祷もなにも移動しかしていない）

「ここが博麗神社よ」

「すまない、階段が長くて神社本体が見えないのだが」

本当に長いな、これを歩いて登りきれってか？御免被りたい話だがことわりゃその時点で俺の妖生終了の合図になるな。

「「私は普通に登るのは疲れちゃうから飛んでいくわ。後よろしくね～」」

一文字も間違えずにこの巫女＆騒霊は同じ台詞言って飛んで行きやがった、畜生め。

「はぁ、行くしかないな」

「だな」

ここで立ち止まってもしゃーねーからな。

１５分経過・・・

「ぜぇぜぇ・・・・やっと登りきった」

「空、疲れたからって寝そべるなんてだらしねえな。俺を見習えよ、もっとシャキッとしろよ」

全く体力無さすぎだろ。だから最近の若者は云々言われるんだぞ。

「ふざけんじゃねーよ！お前途中でいきなり飛べるようになりやがって、しかも俺に見れびらかすみたいにグルグルゆっくり飛びやがってよ」

そう、この俺は駄目もとでギャク日の聖徳太子みたいにシャイニング摂政ポセイドンっていいながらジャンプしたら飛べてしまったのだ。

「練習もしないで飛べるようになるなんてますます危険ね」

なぜそうなるよ、博麗の巫女さんよ。

「あら飛べるようになったの、なら弾幕もすぐに撃てそうね」

「そーかもな」

「で、神社にも着いたがこれからどうするんだ？」

「そうねぇ、神社の掃除とか洗濯とかご飯の支度や人里に神社の宣伝でもしてもらおうかしら」

うわーお、この巫女さん俺らに仕事ぜんぶ任せるつもりだ。

「前半はともかく後半の人里に宣伝ってあなたがわざわざ危険だと思った私たちを人里に行かせるってどうなのかしら」

「いいのよ、なんかしたらただじゃおかないし。それに騒霊や妖怪も受け入れる神社ってことで売れるかもしれないじゃない」

どうやら博麗の家計は皆、金に目が無いようだ。

「あとは・・・・自己紹介ぐらいかしらね。私は博麗　霊香(れいか)よ」

「俺から順に狂歌　幽月、カナ・アナベラル、落雲　空だ」

何かボケをかまそうかとも思ったが何事もはじめが大事って言うからあえて普通にしてみた。

「そう、じゃあこれから長くなるけどよろしくね」

・・・・・あれ、長くなるのかよ。館作って貰った意味ねーじゃねーかよ。

「つっこむとこそこかよ！？」

第七言　博麗さん現る（後書き）

感想などはいつでもお待ちしてます。

魔界や夢幻世界の説明を書いた方がいいでしょうか

第八戦　弁慶の泣き所って本当に当たると痛い（泣）（前書き）

こんばんはー、更新出来そうに無いって言ったのに書けました。
といっても疲労が半端無いので誤字脱字などの点検が厳かになってると思います。
見つけ次第渇を入れてください

それでは第八戦を楽しめないのでご注意しながらお読みください。
どうぞー

第八戦　弁慶の泣き所って本当に当たると痛い（泣）

博麗神社に強制的に滞在することのなった俺たちはとりあえず境内の掃き掃除と廊下の雑巾がけをした。
掃除の途中、霊香が茶の間でくつろいでたので雑巾を顔に投げてやった、それも思いっきりに。俺は異常な妖怪スペックだから普通の人間が食らったら１００％首がもげて辺りに華を咲かすはずなのに奴は吹っ飛んだだけだった。それで起き上がったあいつは頭に大層立派な四つ角を作り殺気をたてながら俺を睨んできやがった。下手すりゃ大惨事になるところだったが空が必死に俺らを止めたため難を逃れた。

そんなこんなことがあり、今は縁側で茶を啜ってる。西にお天道様が落ち始めているので空一面真っ赤だ。もうじき夕飯の用意がどうたらこうたら言ってきそうなので今のうちトンズラをこうと思う。こちとら朝から弁当作ったり、親方っ！空から女の子が！ってなったりしてたんだ。少しぐらい休んでもいいと思う。え？現在進行形で休んでるって？そりゃ言わない約束だぜ。

「そんじゃ、そこら辺ブラブラしますかね」

行き先決めてねーからなぁ。まぁとりあえず飛んで空中散歩でもすっかな。

飛んでそんなに経ってねぇが、やっぱりもといた世界じゃ見られない自然溢れる世界なこった。
見てるだけでスカッとすらぁ。

・・・・・・・なんか下が騒がしいな、せっかく気分爽快だったのによ。
このまま素通りするのはちょいと惜しいな・・・・・しゃーねーな、いっちょ行ってみますかね。

「まだか！？まだ見つからないのか！？」

「早くしなければ夜になるぞ！」

「駄目だ、こっちにはいなかった！」

なんだなんだ？良い年したおっさんや青年が武装して血眼でなんかさがしてらぁ。
こっそり近づいて何探しに行くか調べてみようかねぃ。んじゃま、気配を消して・・・・は出来ないが息殺していりゃ、慌ててるあいつらにゃ気付かれるわけねーだろ。

「な、何奴！？」

・・・・・・ええぇぇぇぇ何だよそれ、開始1分も経ってねーじゃんか。

「俺は俺だが何か」

「だっ黙れ妖怪め！・・・・・・・まっまさか！俺たちよりも花子を早く見つけ出して食うつもりか！？」

おいおいおい、なんでそうなんだよ。なんかテンプレ臭がすんだが。しかも花子って昭和感が溢れ出してとどまることをしらねーぞ。それに人食うなんてもうやめたしな。

「いやなんでだよ。俺はなー、のんびり空中散歩をエンジョイしてたのによー。てめーらがぎゃーぎゃーうるせーから何事だって思って来ただけだぜ」

「妖怪の言うことなんて信じられるか！」

ひでーなおい。しかもまわりも「そうだそうだ！」とか言うなよ、なんか俺がいじめられてる哀れな子みてーじゃねーかよ。

「お前達は先にいけ！こいつは俺たちが食い止める！」

なーんか死亡フラグビンビンなことを言いやがったぞこいつら。殺しちまうのも面白そうだがそんなことしたら霊香に存在を消されそうだからよしとこう。全員気絶ってとこかね？

「チェストー（棒読み）」

適当に腕を振り回したらあら不思議。風が起こりむさい男たちを吹き飛ばして気絶させたではありませんか！・・・・やべーなおい、楽しくてしゃーねーな。ってもう全員意識飛んじまったのかよ、はえーなおい。

ちょいと時間が経って、現在俺はあいつらのいっていた花子を探している。

「といっても特徴もわかんねーからどうしようもねーな」

あーあ、もう帰っちまおうかな。「きゃあああああ」っておう符。自分から位置を知らせてくれるたーなかなか気遣いが出来るガキだ。だが、もう少し普通に教えてくれりゃ良かったんだがな。これじゃ襲われる数秒前みてーじゃねーかよ。・・・・・・・急ぐか。

やっと見つけたぜ。ついでにとっても、そりゃとっても大きな蜘蛛と一緒に。

「いや・・・こないでぇ」

ありまガキんちょが半泣きだ。まあ当たり前なんだがな。

「おーいでーじょぶかー？」

どっかの正義のヒーロー的な登場だぜ！といっても妖力を開放してニヤニヤ笑いながら近づいてるだけなんだがな。

「ナンダ、キサマ？」

ちきしょう、なんでビデオもってきてなかったんだよ。喋る蜘蛛なんてそうそういねーのに。

「俺は俺だ」

もうこの台詞を俺のきめ台詞にしようかね。

「フザケルナ、オマエカラコロシテヤル」

って言いながら足をこっちに振り下ろしてきやがった。

「おっとっと」

なんとか避けたがあたったらこれ洒落になんねーな。

「んじゃこいつの切れ味、試してみますかね」

番傘を試したかったんだが生憎神社に置いてきちまったから太刀にした。

刀の持ち方は八相にしてと。適当に北見一刀流の風雅をしますかね、うろ覚えだがな。

「せいや、でりゃよっと」

最初は正面で3発目に思いっきり右足を前に出し相手の左に付く。

そこで流れるように切り続ける。

「グギャアアァァァ・・・」

ズズンと音をたてながら蜘蛛は倒れた。つーかまだ数えられるぐらいしか剣を振ってねーぞ。しかも蜘蛛の足がバターみたいに切れやがって。スゲーなおい。

「そんで、怪我はねーかい？嬢ちゃんよぉ」

俺は顔に緑色の血を付けながら出来る限り妖力抑えて話しかけた。

第八戦　弁慶の泣き所って本当に当たると痛い（泣）（後書き）

実は初の戦闘回なんです・・・・・が短い！みじか過ぎるよ！
そういや真剣って実は人を3，４人切っちゃうともう切れなくなるんですよね。
本物は実家に有るので行く度に見たり振ったりしますけど、重いです。
ちなみに幽月さんが使ってる刀諸々は神様の加護（笑）がついてるので何人切っても手入れをすれば無制限で切れるようにしてあります。というか今決めました（ぇ

感想なりクレームなりアドバイスなり何なりお申し付けください！
実はアンケートしようかしないか考えてたり↑釣りとかじゃないです、皆様の反応で決めたいと思います（といってもそんなに大したものじゃないんですがね）

それでは又次回でお会いしませう！ばいばばーい

第九打　ひとざと！（前書き）

いつにもまして駄文です

どうやって投稿したかというとｔｘｔファイルをｐｓｐに入れて新規小説のとこのファイル投稿で行いました！

長らくお待たせしてこの出来映え・・・自分がヘボすぎて泣けるぅ！
そこに痺れぬ！憧れぬぅ！
それでは第九打です。どうぞ～

第九打　ひとざと！

「そんで、怪我はねーかい？嬢ちゃんよぉ」

「は・・・はい」

辛うじて聞こえるぐらい小さな声だな。まあ、さっきまで襲われてたんだししゃーねか。

「おめーが花子か？」

「そう・・・です」

「なんでこんな時間帯に人里を離れたんだ？」

「お母さんが風邪で・・・・それで慧音先生にきいたらこの辺りに風邪に良く効く薬草が生えてるっていってたから」

なんともまぁ親孝行ながきんちょなこった。

「けどよ、薬草探しに行ってそのままポックリ逝っちまったらどうすんだよ？」

「うっ・・・・それは、その」

「だろ？母親気遣うのはいいがな、一人でぶらつくのは今度から止せよ」

「・・・はい」

って良く見りゃこいつ右足怪我してらぁ、うわっドクドク血が出てきやがる。これじゃ歩くことは無理だな。

「おいお前、足怪我してんだろ？ほら、おぶってやっから道案内しろよ？」

「でも・・・」

「その足じゃ歩くなんて無理だろ？そーゆーときは素直に甘えろや」

そんでもって少しづつ、ためらいながら俺の背中に乗っかった。ためらうのは俺の着物が汚れるからって理由だろうけど、俺のことが単純に嫌っても感じられる・・・・・なんか悲しくなってきた。

「あっあの」

「ん？どーした、足でもいてーのか？」

「そうじゃなくて、彼方のお名前を聞こうと・・・」

「聞いてどーするんだ？」

「慧音先生に困ったときに助けてもらったりしたら相手の名前を聞くように言われてるから」

そうゆうことか、原作でも真面目な性格のけーねさんだからそういったことはキチンと教えるらしいな。
寺子屋にカナを預けてみたら少しは性格改善するかな？

「幽月だ、妖怪の幽月。そう覚えとけ」

・・・あり？いきなり花子の顔が真っ青になりやがった。・・・ああ、妖怪って聞いたからか。

「心配すんな、別にお前を取って食おうなんて思っちゃいねーよ。そんなことすんのは妖力の少ない妖怪だけだ」

「幽月様はなんで私を助けたんですか？妖怪はどんな人でも殺そうとしているってみんな言ってたのに」

「そりゃ、俺は俺だからだよ。最初はオッサンどもが目を血走らせてたからなんだと思ってよ、近づいたらお前が見つからないってことだったらしくてな。暇つぶし程度にお前を探してみたんだよ」

「変わったお人なんですね、幽月様って」

「だから俺だからさ。あと様付けは止してくれねーか？なんか俺が変態に思われそうで怖い」

「そうなんですか？じゃあ幽月さんで」

決めるのはえーな。

そんな話のやり取りがあってやっとこさ人里に着いたわけなんだが、やはり花子の言ってた通り皆俺を恐怖だったり怒りだったりそういった目で見てくる。・・・・・こんなときでやっぱり自分はおかしいとおもう。だってこんな目で見られれば普通は嫌がったり逃げたりするはずだ。だか俺の場合、そういった異教徒を見るような目が心地よく感じてしまう。・・・モットソンナ目デ見ロ、俺ヲ苦シマセロ、俺ヲ追イ詰メテミロ、俺ヲ壊シテミロ。ソシテ俺ガ壊シテヤル、犯シテヤル、泣カシテヤル、殺シテヤル
っと危ない危ない、危うく暴走するとこだった。ってなんだ？いつの間にか周りをかこまれてらぁ。
なんだかさっきも同じようなこと無かったか？

「その子をどうするつもりだ！」

「妖怪は出てけ！」

やっぱりこんな感じか、こりゃ早く花子返して帰った方が身のためだな。

「こっこれでも食らえ！」

後ろからそんな声がして振り向くと拳大ぐらいの大きさの石が頭に直撃しやがった。
・・・・当たりどこがちょいと悪かったな、クラクラすらぁ。だめだ、ぶっ倒れる・・・

「知らない天井だ」

一話から言えなかった言葉をようやく言えた。
頭には包帯が巻いてある。ってことは誰かが治療してくれたってことか。

「ああ、気が付いたか」

声のした方向を見るとＣａｖｅｄ！！！！でおなじみの上白沢　慧音さんがいた。
・・・・このやり取り、前にしたな。

「すまなかった、うちの生徒を助けてくれたとはしらず里の者が彼方に失礼なことをしてしまった」

おいおい、起きて早々謝られるってどういうこった。

「べつになんともおもっちゃねーから安心しやがれ。んなことより花子はどうした？」

「花子ならほらそこに」

みてみりゃ俺の隣の布団で寝てた。かわいらしい寝息を立ててるのだが額が青い、そりゃもう鈍器で殴られたみたいに。

「心中後察知します」

「なぜそんな言葉がでるんだ」

「お前がお説教したらトチって・・・・」

「殺してない、頭突きしただけだ」

なんで説教で頭突きなんだよ、普通は拳骨とかじゃないのか？

「頭突きでこんなになるって、どうゆうことだよ」

「私は石頭だからな」

いや石頭でもこれはねーだろう。

トントンと戸を叩く音がした。

「む、誰か着たようだ。すまないが少し待っててくれ」

そういうとけーねは戸に向かって歩いていった。

そんでもってけーねが帰ってきた。

「本当に申し訳ない」

俺に土下座する男を連れて。・・・これ、さっきからなんの嫌がらせだよ。

「いや、顔をあげてくれ。そこまで謝られると逆にこっちがいずらくなる」

「しっしかし・・・」

男の話からするとこの男は花子の父親で、夢中で娘を探し一旦里へ帰ってきたところ妖怪である俺が花子をおぶってるのを見て連れ去っていくように勘違いしそこらにあった石で俺を攻撃したらしい。

「でもよ、妖怪相手にそんなことできるってのは余程娘が大事だってことだろ？」

「そりゃもちろんですが」

「ならその愛情に免じて今回のことは無しにするぜ、だがなこれからは蛮勇もほどほどにな？下手に刺激すると頭が弱そうな妖怪でも人間1人ぐらい軽く殺しちまうからな」

「あっありがとうございます！！」

「さて、俺はこれでお暇させてもらおうかね」

「もうかえってしまうのか？せめてこの子が起きるまでいても良いと思うのだが」

自分でやったくせにそりゃ無いだろうよ。いつのまにかけーねが俺に対して敬語やめてるな。別にどうということはねーけど。

「残念だが俺は一刻も早く帰らないと怖い巫女さんに血祭りにあげられそうだからな、また今度ってことにしといてくれや」

「・・・・なんかすごいことを聞いてしまった気がするのだが」

「気のせいだ」

「ではまた近々来てくれよ？きっとこの子もお前のことを待ってるだろうからな」

「あいよ」

そう答えて俺は神社に向けて全速力で飛んだ。
自分でトンズラこいたくせに情けないと思うかもしれないが、あの巫女さんが怒り心頭で俺に向かってきたらと考えたら鳥肌がたったんだよ。イソギンチャクの二の舞は御免だからな。

神社にもどるとそこは更地だった。正確に言えば神社がグチャッと潰れていた。

「・・・・・今晩どこに泊まるんだよ」

第九打　ひとざと！（後書き）

はい、幽月さんが無駄に男っぽかったり狂気に染まりかけましたね
なんか文が変ですね、とびとびになってます（泣）
これでもがんばってる方なのに、文才無いのかな？
嗚呼無いんだった！あっはっは

そして展開が急すぎるｗｗｗ
正直言っていらない動作多かったんですがただ文字数稼ぎｔ（ｒｙ

感想など何でもかまいません！何かありましたら感想や活動報告などにコメしてくださいな！できるだけ早く対応しますよ～

では次回ノシ

第十怒　夢幻の世界へさぁ逝くぞー（前書き）

こんばんは堕落小浜です。うそです、糖類おぅです
別に私の本名は小浜ではないのであしからず

結構書き溜めしてたんですが全部一回消して構成などを変えました。
あさってから修学旅行とか風邪ひいてる私には鬼畜過ぎますｗｗｗ
では第十怒です。ＤＯ・Ｕ・ＺＯ☆←キモイ

第十怒　夢幻の世界へさぁ逝くぞー

怒られるのが怖くなって猛スピードで神社に帰ってきたわけなんだがその神社はつぶれていた。

・・・・別に浦島太郎とかじゃないよな？実は俺がさっきまでいたとこは人里じゃなくてもしかしたら龍宮城だったとか。だとしたら俺、お土産ももてなしも受けてねーじゃねーかよ。クソッ損したな。

「おーい！幽月ー！どこ行ってたんだ、心配したんだぞ！」

たぶん俺を心配してくれるのはこいつぐらいだろう。

「ちょいと散歩した後、一狩して来た」

「一狩って・・・モンハンかよ」

ちなみに作者はモンハンのやりこみでＰＳＰ２台壊したな。

「まったく、行くなら行くで何か言いなさいよ。心配したじゃないの～かっこ棒読み」

「自分で棒読みとか言うなよ」

こいつは相変わらずだな。

「そんで？なんで神社が潰れてんだ？どうせカナが料理してこうなったんだろうけどよ」

「ひどいわね～、それじゃまるで私が料理できないみたいじゃない」

「実際そうだったろうが。今朝だって標識担いで台所来たくせによ。どこの漢の料理だよ。そんなんで料理したら台所は爆心地になって出来たものは食材の墓場と化すわ」

もうその惨状が頭に浮かんで来る。

「そんなこと無いわよ、ただダークマターが出来てしまうだけよ」

「いや自覚してんのかよ！？」

「自覚してんならまだマシだな。でもやってしまったには変わらない。正直に霊香に謝ってこい。そうすれば許してくれるだろ・・・・・たぶん」

たぶんだ、たぶん。保障なんて絶対に出来やしねーな。

「だから私じゃないわよ」

じゃあ誰だって言うんだよ。というかそれ以外なんて思いつかないぞ。

「あっ居た居た。あんた達、今からお礼参りに行くから準備しなさい」

「「「・・・・・は？」」」

「おいおいずいぶんと急だなお礼参りなんて」

「そりゃ私の大事な大事な神社を壊されて黙ってるわけ無いでしょ」

「それはそうとどこにいくつもりなのかしら」

「幻月と夢月のところよ」

・・・・結局目的地へ行くことのなるのかよ。というか面識あんのかい。

「おいおいおい！なんでそんな危なっかしいとこにいかなくちゃいけないんだよ！」

「なんでって言われても、そこに敵がいるからよ」

なんか地味にカッコイイな。

「なぁ霊香、俺の番傘どこ行った？」

「それならはい、ここにあるけど」

何も無いところからトンと番傘から出現した。どこのスキマ妖怪ですかコノヤロー。

「それじゃ、出発するわよ～」

うわーお結局用意も何もしないままだよ、なんだよこの人。

現在飛んでます、ハイ。とても眠いです、お腹減りました。もうとっくにお天道様は地に落ちて月がこんにちはって言ってくる時間です。

「というわけで疲れた、ダルい、休ませろの三連撃」

「何でよ、嫌よ、置いてくよの三連撃返し」

なんてやつだよ、鬼畜過ぎるぞ。お前やカナはただ飛んでるだけだが俺は空をアンパンを顔に付けてるスーパーマンみたいに背中に乗っけて飛んでんだぞ。

「後どれくらいなのよ、私もいい加減疲れたわ」

「ほら二対一だザマーみろ、大人しく休憩タイムにしやがれ」

「五月蝿いわね、まず手始めにあんた達を血祭りにあげてやるわよ」

なにそれこわい。

「それにもうすぐそこよ」

もうすぐって言われても下は森林のオンパレードで湖なんてねーんだが。

「うわっ！？幽月おまえ居眠りすんじゃねぇ！落ちそうになったじゃないかよ！」

「そりゃすまんかったなー、でもよさっきから風景が一定だとよ眠

くなるんだよ。なんか俺の眠気を吹き飛ばすようなことしてみろよ」

「何その無茶振り！？」

「そうよ～なんかやってみなさいよ、さもなくば私が引きずり落とすわよ」

「無茶振りの上に脅迫かよ！？・・・・もうやだこいつら、疲れる」

疲れるとは侵害だな、俺はただお前の困った顔を見るのが面白いからやるだけなのに。

「ぎゃーぎゃー五月蝿いわよ中二のノリじゃないんだからもう少し大人しくしてなさいよ。それにもう着いたわよ」

駄弁ってたらいつの間にかついたらしいな。つーかこの時代に中二がいるのかよ。

そんでもって湖上空を飛んでたわけだがいきなり隙間みたいなものが出来て引きこまれた。

「ってーな、なんだよずいぶんと手荒い入り方だなおい」

「しょうがないでしょ適当に入ったんだから」

適当にって・・・・ちゃんとやったらどうなんのかいささか気にな

るな。

「ここが夢幻世界なのかしら？なんか変なとこね、来て損した感じだわ」

「お前が言うな」

「変なとこってなによ！」

おお？聞きなれない声がしたと思ったらメイド服を着たパツキンの少女がおりましたとさ。どう見たって夢月だな。

「ちょっと夢月！あんた人の神社つぶすなんて良い度胸してるわね？覚悟は出来てんのかしら」

「もとはといえばあなたがこの世界に勝手に入ってきて姉さんと私を問答無用で襲った後食料もてるだけ奪っていったのが原因なんだけど」

「なんちゅー鬼畜だよ」

「外野は引っ込んでなさい！いいわ、何がどうあれ神社を直しなさい今すぐに。そうすれば半殺しで許してあげるから」

「全然許して無いじゃないの！」

「問答無用！直す気が無いなら嫌でも無理やりにでも修理させてやるわ！」

「そんな理不尽な」

「私の辞書に理不尽なんて言葉は存在しない！」

こうして霊香ｖｓ夢月の戦いがはじまった。

「なんか今回ようやく出れたと思ったらほとんど空気じゃね？俺ら」

「別に出れたから良いじゃない、実はこの話は５話先の話と合体させたせいで出番失ったキャラがいっぱいいるんだから」

「おいそこメタんな」

第十怒　夢幻の世界へさぁ逝くぞー（後書き）

はい、出番を消されたのは言わずともがな夢幻館の方々です。
幽月「作者が嫁をはぶるとは珍しいな」
夢幻世界編が終わったらちゃんと出します。

そしてそして！６４６４ＰＶ＆１０４４ユニークありがとうございます！
感謝感謝です！
幽月「こんなに伸びるとは想定外だったな」
番外編でもやってみようかな、作者の趣味てんこ盛りと皆様の好きなキャラとかで

感想・クレーム・誤字脱字・アドバイス・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

第十一狂　幽月と幻月（前書き）

藪遅くにこんばんは、糖類おぅです
昨日修学旅行から帰ってきた訳なんですが持っていけなかった我が愛しの恋人である楽器ちゃんといちゃいちゃしまくったので昨日は執筆できませんでした！（お返事はしたけど）
そんでもって今日、ＰＣの前に座ってるんですが手が華扇ちゃん状態です包帯グルグルです。
理由はあれです、エレキ三味線を変なテンションで何時間も弾いてたからです。
手は痛いですが幽雅に咲かせを一応弾けるようになりました！
やったね、糖ちゃん！
和楽器はいいですよ、もう結婚したいくらいです。津軽三味線や長唄三味線欲しいんですがまだそこまで上手くないんで買ってません
（安もんで我慢なぅーです）

ってなわけで第十一狂でっせ！どうぞ～

第十一狂　幽月と幻月

「さぁ始まりました霊香ｖｓ夢月のタイトルマッチ。司会は私ことみんなの汚兄さん幽月でお送りいたします。そして解説にカナさん、ゲストとして夢月選手側である幻月さんにお越しいただきました。カナさん、幻月さん、よろしくお願いします」

「「はいよろしくお願いします」」

「えー今回は二度目の対戦とのことですが、カナさん、これを踏まえてこの試合どう動くとお考えですか？」

「そうですね～、今回二回目なのですから相手の弱点なども分かってきますのでねそこを上手く突いていけた方が勝つんでは無いでしょうかね？」

「なるほど、自分の弱点をカバーしつつ相手の弱点を攻めるという感じですか。幻月さんはどうお考えですか？」

「私はこの試合、かなりの苦戦になるかと思いますねぇ」

「それはどういった理由で？」

「カナさんもおっしゃった通り一度相手をした敵はお互いの攻撃パターンを攻略していくんで簡単に倒すことは難しいと」

「そうですか、これからの対戦の動きが気になりますね。っとぉ！先制を仕掛けたのは霊香選手だ！大量の札を拡散させながら飛ばし夢月選手の動きを封じるのでしょうｋ（ｒｙ」

「おいいいいいいい！お前ら一体何してんだよ！？」

「何だよ妖怪（ひと）が折角スポーツの試合風に小説の文字埋めをしてるってのによ」

「そうよ～、今ちょうど良いトコだったのに邪魔しないでくれるかしら？」

「いや邪魔ってなんだよ！？それとなに相手の姉を連れ込んでんだよ！危ねーだろうが！」

「危ないってに何よ」

「実際そうだろうが！だいたいどうしてこうなったし」

「しゃーねーな、読者もたぶん置いてきぼり状態だろうからとてもとてもこれほどにも無いくらい親切な俺が今の状況を説明しようと思う。

回想ｔｉｍｅドン！」

遡ってちょっと前のこと

「って戦闘をすぐにおっぱじめると思ったらふたりそろってだんまりじゃねーか」

「そうよねぇ。こんななんにもない世界でジッとしていたら頭がど

うにかなってしまいそうよ」

大丈夫だ、お前はすでにイカれている。これ以上の狂いようが無い。

「なら私と遊ばないかしら？」

「誰よあなた。どこから湧いてきたの？」

「初対面の相手に何よ！まぁ私は幻月。そこの霊香の近くにいる娘の姉よ。とりあえず私も暇だから遊びましょうよ」

ここで夢月の姉、幻月の登場。少しばかりご立腹の様子だ。湧いてきたといわれたそりゃ怒るわな。そしてここでの遊びは間違いなく夢幻世界の外でやったらデットオアアライブになるであろう禁ずるざる負えない遊びだろうな。

「遊ぶ前にあいつらの『遊び』を面白おかしくしてみねーか？」

「面白いなら大歓迎よ！」

「私も同じく～」

「ちょっとまて正気かよ！？」

台詞はたぶん誰が言ったかはわかるだろう。

「俺は一度も正気だったこたぁねえぞ」

「ドヤ顔で言われても困るだけなんだが・・・」

「そんなことはどうだっていいからはやくやりましょうよ！」
幻月が滅茶苦茶目を輝かせながせながら俺に催促してきた。
「やり方は至ってシンプルだ。あの二人のドンパチを俺らで解説やら独自の解釈で実況するってだけだ」
「それって面白いのかしら？」
「これ書いてる作者はウィイレは絶対に実況無いと静かで死んじゃうらしいぞ」
「そこまで大事なシステムか？」
「まぁ実際にやってみた方が良いだろ」
「「そうね」」
「えっ本当にやるのかよ！？」
本当も何も最初からそのつもりだったんだがな。

「ってな感じだった」
「納得いかないのは俺だけなのか？」

「最近作者はゆっくり実況とかにはまってるからその影響だと思うぞ」

本当は動画とかでいちいち影響されちゃダメなんだろうがダメな作者は行っても無駄か。

え？前回メタんなって言っといて俺は良いのかって？無論おkだ。

なんせ俺が主人公だからな。

「ぶうううるぅあああああ神社直すか死ぬか選びやがれえええええ」

ありま霊香の奴目がマジだ。あれが博麗の巫女の力ねぇ。幻想郷を監理しなきゃなんねーんだから強いのは当たりまえ、それからで天才かただ優秀な人間で終わるか決まるがおそらくこいつは前者だろうな。

「なら食料を返しなさいっよぉ！」

夢月も神主公認チートに良い感じで応戦してるようだ。

「暇だな」

「「そうね～」」

「なんだ？もう実況しないのか？」

ああ実況ね、実況は

「「「飽きた」」」

「あっそう・・・・」

「もしかして自分もやりたかったのかしら？」

「なんでそうなるだよ！？」

なんかこの会話にもマンネリを感じちまうなぁ。

この状況をぶっ壊す俺にしか出来ないような狂った方法はなんかねーかな。

・・・・・・・・・・・・そうだ、この案があったか！

「なぁ幻月」

「なんですか？」

「弾幕無しなら『遊び』してやってもいいぜ」

「それならお安い御用！さあさあはやくやりましょうよ！」

おお、自分でさっき提案しただけあってかなり乗り気だな。

「わたしはここで見てるから近くで殺らないでね～」

「ちょっと待て、幽月やめろ！自分が何しようとしてるか分かって

んのか！」

「何って楽しい楽しい殺し合いだぜ？勝ち目なんて物もわかったもんじゃねーのも重々承知してらぁ。だがな楽に殺すより殺るか殺られるかのギリギリの命のやり取りなんて燃えるじゃねーか」

「・・・・お前、狂ってるぞ」

「かはは、そうだなぁ。俺ぁ狂ってらぁ、そう完璧に壊れてる。だがそれでいいじゃねーか、世界にゃ常人がいる偉人もいる変人もいる・・・・・・・なら狂人がいたっていいじゃねぇか、そうだろ？」

「・・・・・」

「ねえねえまだなのかしら？待ちくたびれたんだけど」

っとお相手が退屈とあれば楽しませてやんなきゃなぁ。

「悪い悪い、待たせたな。そんじゃ、楽しもうぜぇ。命かながらのひった張ったのやり取りをよぉ！」

「うふふ甘く見ないでね、私達二人で一人前なんだからね」

・・・・・自慢になってねぇぞオイ

と言うことで夢幻世界タイトルマッチ第二戦がはじまった。

第十一狂　幽月と幻月（後書き）

ふぁい！

後半の幽月ですがいつものじゃなくてこっちのほうが本当は通常時だったりします。

夢幻世界では死とかはないんですが命はあると勝手に解釈してます。

簡単に言えば夢幻世界に居ればどんな人でも蓬莱人って感じです。

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返しいたしますよ～

では次回で！ばいばば～い☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1005x/

東方妖快園

2011年10月30日03時21分発行